非暴力平和隊・日本(NPJ) ニューズレター

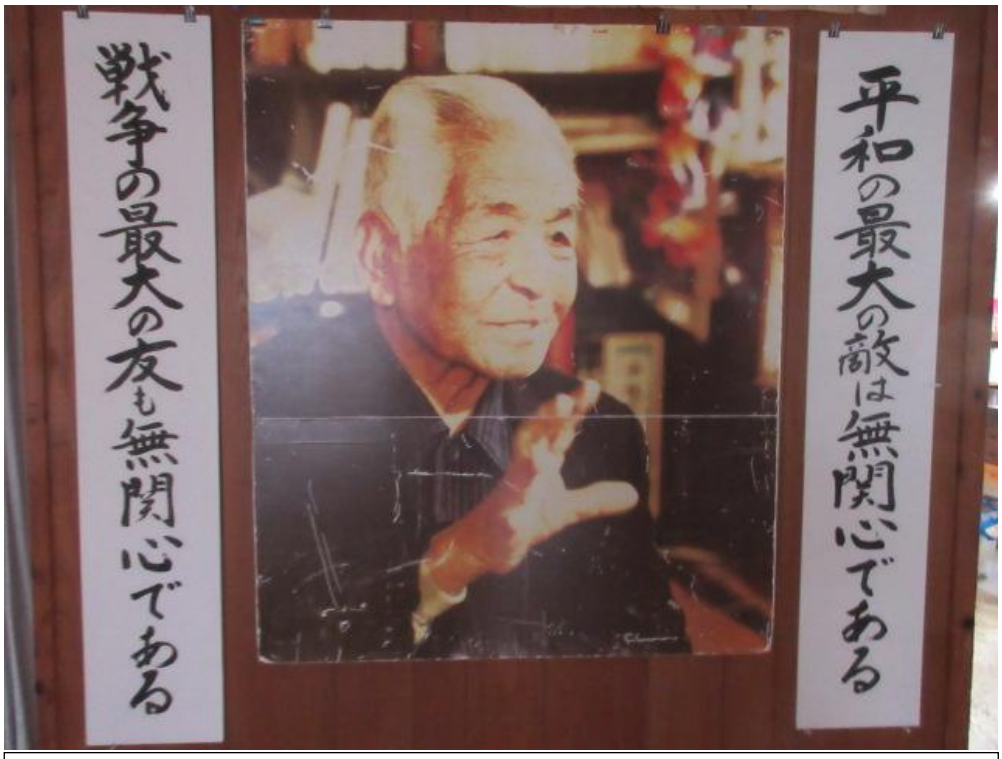
第95号　　2026年4月17日発行

〒101-0063　東京都千代田区神田淡路町 1-21-7　静和ビル 1 階 A 室
スペース御茶ノ水気付　非暴力平和隊・日本

Tel：080-2678-5973　E-mail：office@np-japan.org
Website：http://np-japan.org/

Nonviolent Peaceforce Japan Newsletter

・平和教育を再構築する　君島 東彦　2
・ジーンシャープを読む日々　大里 重彰　10
・非暴力を生きる
　—沖縄・伊江島　阿波根昌鴻を知る —　大畑　豊　14
・伊江島学習会　安藤　博　21
・総会報告・決算報告　22
・カンパお礼　24



阿波根昌鴻の遺志を引き継ぐ「第 24 回 ゆずり合い・助け合い・学び合う会」が 3 月 28～29 日」、伊江島で開催された「無関心な人々を恐れよ」（本文参照）

平和教育を再構築する

君島 東彦

先月 3 月 16 日、沖縄県名護市辺野古沖で、小型船転覆事故が起きて、「不屈」船長・牧師の金井創さんと、「平和丸」に乗っていた研修旅行中の同志社国際高校２年生、武石知華さんが亡くなった。多くの人々と同じように、わたし自身、強い衝撃を受けている。本当に残念で悔しい思いがする。おふたりのご冥福をお祈り申し上げる。この事故について、現在、さまざまな角度から検証が進行中であり、検証の結果を待ちたい。ここでは、平和学習、平和教育に焦点を当てて、わたしが考えていることを書かせていただきたい。

１　そもそも平和とは何だろうか
――平和論は関係論である

平和教育の話に入る前に、そもそも平和とは何だろうかということから始めたい。これはいろいろな考え方があると思う。たとえば、立命館大学国際平和ミュージアムのミュージアムガイドの最初のほうのページを開けると、「人は誰でもが豊かな能力を開花させる可能性を持っています。それを阻むものは何でしょうか」とある。平和学の１つの考え方によれば、人間の持っている可能性を開花させることが平和で、それを阻むものが暴力であると考える。その暴力にはもちろん、第２次世界大戦のような究極的な暴力があり、戦争に至らないまでもさまざまな暴力がある。平和学ではたとえば社会の中にある抑圧や差別なども暴力――構造的暴力――と考える。とはいえ、やはり戦争を防ぐこと、できるだけ武力に依存しないことが重要な課題となる。わたしたちは平和の問題について考えるとき、どうしても武装、軍備の問題に関心が行く。

しかしこれはある意味では表面的な問題である。平和の問題は実は心理の問題である。場合によっては無意識の世界にまで降りていく必要がある。わたしが平和について考えるとき出発点にするのは、18 世紀ドイツの哲学者、イマヌエル・カントの『永遠平和のために』という小さな本である。これは 200 年以上前の本であるが、依然として古くなく、平和について考えるときの大事な問題はすべて含まれている。この本の冒頭でカントは平和を定義している。「平和とは国家間の一切の敵対関係を終わらせることである」とカントは言っている。これはもともとドイツ語であるが、わたしはこのように意訳している。わたしが注目するのは「敵対関係を終わらせる」というところである。つまり、平和とは関係性の概念だということである。関係ということは、

ひとりではないということだ。平和にはつねに相手がいる。相手と自分の関係が平和かどうかということだ。したがって、平和は一国で考えることも一国でつくることもできない。平和論は日本一国だけで考えることはできない。

なぜわれわれは武装するのだろうか。なぜ国家は軍備を持つのだろうか。それは相手に対する恐怖心と不信感があるからである。相手に対する信頼関係がないために、軍備を持つということになる。したがって、相手に対する不信感を減らさなければ軍縮はできない。相手に対してどのような感情を持っているか、相手をどのように見ているかというわれわれの心理状態にまで降りて行かないと平和の議論はできないということになる。軍拡反対、軍縮せよ、といきなり言っても、それは表面的すぎる。国家がなぜ軍拡するのかといえば、それは相手に対する恐怖心と不信感があるからである。そしてある国家の軍拡はその相手の国家の恐怖心と不信感を増幅して、その国家のさらなる軍拡をもたらす。このような軍拡の悪循環を国際政治学では「安全保障のディレンマ」と呼んでいる。国家間の恐怖心と不信感をいかに減らすか、ということが最大のテーマなのである。それを減らさなければ、決して軍縮はできないということになる。それゆえ、平和論は軍事論ではなくて関係論だとわたしは考えている。不信感を減らすのは軍備ではなくて、関係構築、外交である[1]。

２　すべての教科が平和教育である

平和教育という概念、考え方、実践がある。平和教育というと、戦争体験の継承による平和の希求と理解されることが多い。そのような意味で、広島、長崎、沖縄というアジア太平洋戦争で過酷な経験をした土地を訪れて、それらの地の戦争体験を継承するという研修旅行がよく行われてきた。これらの研修旅行に大きな意味があるのは間違いない。

わたし自身は、平和教育をもっと広い意味で理解している。わたしは初等中等教育（小学校・中学校・高校）すべての教科が平和教育であると考えている[2]。「平和」という教科があるわけではない。また、社会科など特定の教科だけが平和をめざしているわけではなくて、初等中等教育全体の目標として平和という価値があると思う。先述したように平和論は関係論であるから、東アジアで、あるいは世界全体で敵対関係を克服し、安定的な相互関係をつくることができるような人間を育成することが平和教育となる。

平和とは敵対関係を抑えるような関係構築である。その関係構築はコミュニケーションであり、コミュニケーションの基礎としての言語があるので、国語科も

英語科も平和教育である。一般的に平和教育と考えられているのは社会科である。たしかに地理・歴史・公民は平和教育にいちばん近いといえるだろう。社会科はこれまでの社会関係を概観し、これから安定的な関係をつくる能力を養うということである。そして、関係ということを言えば、実は理科も自然現象における関係性の探求であるから重要である。もちろん人間関係・社会関係にかかわる豊かな感性を養う芸術科、フェアプレーの精神を教える体育科も平和教育である。

３　社会科における平和教育

ここから、いくつかの教科を詳しく見ていきたいと思う。まず社会科はいちばん多くの人が、これは平和教育だと思う分野だと思う。カントの平和の定義に照らせば、社会科は敵対関係を分析しそれを克服するための教科ということになる。わたしは学生に「いま東アジアに敵対関係はあるか。もしあるとしたら、それはなぜあるのか」ということをよく尋ねる。もちろん敵対関係はあり、それは80年前に崩壊した大日本帝国の行動と関係がある。日本の学生はそれをよく知らないが、中国、朝鮮半島の学生はよく知っている。いまなお東アジアにある敵対関係を制御するために、20 世紀の東アジアの歴史を学ぶことはもっとも重要な平和教育となる。地理教育は開発教育・環境教育に発展するが、地政学にもなる。地政学は下手をすると軍事論になってしまうが、批判的地政学という軍事論を警戒する地政学もある。東アジアにおいて中国、ロシア、日本、米国という４つの帝国の狭間で、これらの帝国に翻弄されてきた「境界領域」（＝「緩衝地帯」）である朝鮮半島、沖縄、台湾の人々は、どのように自己決定権（自決権）を行使しうるかと考えるとき、地政学的な条件を考慮せざるをえない。われわれは地理的な条件から自由ではないのである。公民は、戦争をしない政府をどのようにつくるか、そのために民主主義と憲法はどのような意味があるのかを考えさせる。そのような意味で平和教育になる。

日本で戦争と平和について考えるとき、1945 年で思考停止する傾向がある。たしかに1945年以降、日本本土では戦争はなかったが、世界で戦争がなかった瞬間は１秒もない。朝鮮戦争、ベトナム戦争、アフガニスタン戦争、湾岸戦争、対テロ戦争、イラク戦争、ロシア・ウクライナ戦争、イスラエル・ガザ戦争、イラン戦争と、世界はつねに戦争をしている。これらの戦争と日本の関係はどうだったのか。1945 年の敗戦以降、日本は平和だったではすまないのである。また、2025 年は国連創設80年でもあったが、国連の80年をどう見るか、どのように再活性化しうるのか、「持続可能な開発目標、いわゆる SDGs」にどう取り組むか、といった

テーマもある。これらは高校レベルのより高度なテーマであるが、平和教育の重要テーマといえる。

平和学の大事な主張の１つは、人間社会において紛争はなくならない、という認識である。多様な人間が生きている人間社会では、人々の価値観は異なるため、紛争は起きる。問題は、紛争をいかに暴力化させないか、いかに戦争にしないかということである。平和学の課題、平和教育の課題は、人間社会の中で不可避的に起きる紛争・対立をいかに非軍事的・非暴力的に制御していくかということである。国内においては法制度がある。国際社会には世界政府がなく、法制度が不十分であるため、国際紛争をどのように収拾するかはきわめて難しいテーマとなる。

４　平和教育としての国語科・英語科

ここまでは社会科の話だったが、次に国語科と英語科について考える。わたしが強調したいのは国語科と英語科も平和教育だということである。国語科も英語科もコミュニケーション能力を養うことが目的である。教材が文学作品の場合、想像力や共感力を養うことになるが、論説は民主主義の基礎になる。民主主義は言語的なコミュニケーションに依拠するわけで、コミュニケーション能力がなければ民主主義あるいは安定期な関係構築は不可能である。それゆえ、国語科は重要な平和教育である。

そして、英語は国際社会のコミュニケーションの道具である。日本語だけの世界ではなく、英語の世界の中に入っていくことにより、情報源が広がり、コミュニケーションの範囲が広がっていく。英語を使わず日本語で得られる情報だけで生きていたら、アジア太平洋戦争中の日本人と同じように騙されて終わりかもしれない。日本語の外のメディアの世界に入っていかなければ、重要なバランスのよい情報は獲得できないと思う。いまの日本は鎖国状態だと思う。いまの日本のマスメディアの報道だけでは世界はわからない。われわれが英語を学ぶのは、グローバルなメディアから情報を得て、グローバルにコミュニケーションするためである。

もちろん、英語が国際共通語のように使われているいまの世界の現状――英語の世界支配、英語の言語的覇権――は妥当なのか、それは正義にかなっているのか、ということ自体が問われる[3]。過去のパックス・ブリタニカ（大英帝国が覇権国だった世界）およびパックス・アメリカーナ（米国が覇権国である世界）という世界秩序ゆえに、英語が国際共通語のように使われているのは間違いない。国際共通語を理論的に追求すると、エスペラント語が出てくる。エスペラントは国

際共通語をめざして人工的につくられた言語である。エスペラントの理念はよくわかる。平和運動をやっている人にはエスペランティストが多くいる。しかし、実際に多くの人が使っているという観点から、国際的なコミュニケーションの道具として、わたしたちは英語を使わざるをえないと思う。むかし政治学者のダグラス・ラミスが「イデオロギーとしての英会話」という論稿で、日本の英語教育のイデオロギー性（米国の価値観を押し付けてくる「対米従属性」）を批判したことがあった[4]。これはまったく正当な批判である。わたしはこのような批判を意識して、「英語のエスペラント化」を主張している。つまり、英語をできるだけ英米の文化から切り離して、グローバルなコミュニケーションの道具としての性格を強調するという戦略である。インド英語やシンガポール英語なども立派な英語なのだ。

いまパックス・アメリカーナは終わりつつある。これからどのような世界秩序が出現するのか。多極化ということが言われる。いずれにしても、中国の影響力が大きくなる可能性がある。これから中国の影響力が大きくなってくると、英語と並んで中国語の役割が大きくなるのだろうか。わたしはそうは思わない。なぜなら、いまの中国のエリートは英語がよくできるからである。これからもグローバルなコミュニケーションの言語は英語だろう。中国の大学生や中国の知識人と付き合うとよくわかるが、彼らは英語がよくできる。完璧な英語で中国共産党の政策を話してくるのである。わたしは2011 年から立命館大学国際関係学部の君島ゼミの学生たちと上海を訪れて、復旦大学国際関係学部の学生たちと「日中学生平和対話」というものをやってきた。2018 年からここに韓国のキョンヒ大学国際学部の学生たちが加わって、「日中韓学生平和対話」となった。この日中あるいは日中韓の学生対話は英語でやる。東アジアにおいても、トランスナショナルなコミュニケーションの言語は英語なのだ。英語科も平和教育なのである[5]。

5　芸術科・理科・保健体育科・道徳科における平和教育

芸術科、理科、保健体育科、道徳科、これらも平和教育である。

平和とは敵対関係を克服することだと言ったが、それはつまり他者との共存である。自分自身と価値観が違う他者と共存することが平和である。他者と共存していくうえで必要な想像力、感性を養っていく芸術科は平和教育である。

理科、自然科学の知識も必要である。地球環境問題、気候変動問題、エネルギー問題、核問題、感染症問題等々、すべ

て重要な平和問題であり、自然科学の知識が必要である。「オッペンハイマー」という映画があったが、あれはいい映画だと思う。核分裂が 1938 年 12 月に発見されてから原爆が完成するまでの物理学者を描いている。理科も平和教育なのである。

保健体育科も公正なルール、フェアプレーの精神を教育していく平和教育といえる。道徳はもちろん平和教育である。道徳では、人間の尊厳、他者の権利の尊重、そして他者との共存を教えると思う。

結局、初等中等教育全体が平和教育であるというのがわたしの考えである。

6　教育の方法における平和性の追求——フレイレと響き合う

平和教育について考えるとき、「教育の方法における平和性」という側面も無視することができない。教師が「正解」を生徒に押し付けていく権威主義的、権力的な教育は平和的とはいえない。平和を追求するのであれば、教育方法も平和的であるべきだろう。

これについては、ブラジルの教育学者、パウロ・フレイレ（1921-1997）の理論と実践が参考になると思う[6]。フレイレがめざしたのは、教師と生徒が対話的な関係の中で、ともに世界を批判的に認識しつつ自己変革し、その実践を通じて社会変革へ向かうことである。平和教育はこのようなもの——対話的、批判的世界認識、変革につながる実践——でありたいと思う。わたし自身、大学の授業でこのような方向性をめざしている。

7　ピースツーリズムをつくる——京都でどこを訪れるか

小学校・中学校・高等学校では、研修旅行あるいは修学旅行として、広島、長崎、沖縄等の過酷な戦争体験をした土地を訪れて、平和学習をすることがよく行われている。わたしはこれはピースツーリズムという平和教育であると思う。いまピースツーリズムに関する研究が、平和研究と観光研究の両面から進展している。

ピースツーリズムとは何か。わたしのさしあたりの定義は次のようなものである。「さまざまな現場に入っていって、そこでの直接体験、発見、対話を通じて、平和創造、平和構築の主体をつくる」ということである。

ピースツーリズムというと、過去の戦争にかかわる場所を訪れることが多いと思う。もちろんそれは重要なのだが、それだけでは視野が狭いだろう。わたしは

京都に住んでいるので、京都を例にとって議論をしたいと思うが、京都で次のような場所を訪れることもピースツーリズムなのではないかとわたしは考えている。

１）広隆寺

――東アジアの古代と現代を考える

国宝弥勒菩薩半跏思惟像で有名な広隆寺は、京都太秦にある京都最古の寺である。古代からいままで日本は東アジアの中で、大陸の中国と朝鮮半島との関係の中で生きてきた。広隆寺は東アジアの過去・現在・未来を考える格好の地である。

２）東映太秦映画村　――戦国時代という日本の内戦をどう考えるか

ここは「東洋のハリウッド」、日本映画の聖地である。時代劇は日本の内戦としての戦国時代を考える素材である。世界の他国の内戦と比較して考えたい。

３）　坂本龍馬の足跡

――土佐人が構想した日本と世界

京都には幕末に活躍した坂本龍馬の足跡が数多く残っている。坂本龍馬と彼に続く土佐人、中江兆民や植木枝盛は明治初期に日本と世界を構想した。彼らの構想について考えたい。

４）同志社大学・尹東柱詩碑

――日韓関係について考える

韓国の国民的詩人、尹東柱は 1940 年代前半、同志社大学に留学していた。同志社大学のキャンパス、および彼が下宿していた武田アパートの跡地に、尹東柱（ユン・ドンジュ）を記念する碑がある。彼をめぐっていろいろなこと（治安維持法、日韓関係等）を考えさせられる。

５）京都大学理学部

――核について考える

京大理学部は原子核物理学の世界の最先端であり続けてきた。戦争中は、理学部の荒勝研究室は海軍とともに「F 研究」をしていた。これは原爆開発を目的としたものではなかったが、原爆開発と地続きではあった（これについては「太陽の子」という映画がある）。京大理学部では核について考えさせられる。

６）京都鉄道博物館

――幻の原爆投下目標

梅小路機関区の跡地に京都鉄道博物館がある。ここの転車台（ターンテーブル）は 1945 年 7 月まで原爆投下目標だった。7 月下旬に、スティムソン陸軍長官の判断で目標からはずされた。それが広島に投下されたのである。梅小路の転車台でわれわれは原爆投下について考えさせられるのである。

７）嵐山・周恩来総理記念詩碑

――日中関係について考える

嵐山の小高い丘に、1979 年、日中友好を願う日本の関係者によって、周恩来総理を記念する詩碑が建てられた。若き周

恩来が帰国する直前、京都嵐山を訪れたときにつくった詩「雨中嵐山」が刻まれている。わたしたちはこの詩碑の前で、日中関係の過去・現在・未来について考えさせられるだろう。

このように、京都の各所に、平和について考えさせられる場所がある。これらの場所を訪れて、それらが喚起するテーマ、問題について考えることは、京都ならではの平和学習となるだろう。

平和教育にしてもピースツーリズムにしても、広い視野のもとで再構築するのがわたしの目標である。考察を続け、実践を試みたいと思う。

【謝辞】本稿を準備するにあたって、野島大輔氏（非暴力平和隊・日本会員、立命館大学国際地域研究所客員協力研究員）から有益な示唆を得た。御礼申し上げる。

---

[1] 関係性の概念としての平和については、Morgan Brigg, Furthering relational approaches to peace, *Journal of Peace Research* Vol. 62 (4), 1046-1060, 2025 等を参照。ガルトゥングにも関係性を重視する論稿がある。ヨハン・ガルトゥング（野島大輔訳）「平和の探求——テロリズムと国家テロリズムの世界にあって」千葉眞編『平和運動と平和主義の現在』（風行社、2008 年）53-79 頁。平和を関係性の概念としてとらえることの背景には、21 世紀の社会科学における「関係論的転回」（relational turn）、関係主義（relationalism）の興隆という状況もある。これらの点について、さしあたり酒井啓子編『グローバル関係学とは何か』（岩波書店、2020 年）の序章を参照。

[2] すべての教科が平和教育であるという考え方については、竹内久顕編著『平和教育を問い直す——次世代への批判的継承』（法律文化社、2011 年）から大きな示唆を受けた。平和教育の定義、内容については、さまざまな考え方がある。戦後早い時期の議論として、小学校における実践にもとづく考察、師井恒男「平和のための教育計画」（『教育』1952 年 7 月）がある。師井は、平和教育として 6 つの領域・目標を設定している。すなわち、１）いのちを大事にする（人権尊重）、２）日本の貧困をたてなおす（生産復興）、３）世界の良心と結ぶ（国連憲章、ユネスコ憲章、日本国憲法等の尊重）、４）すじみちのたったことにしたがう（科学的合理的な精神の重視）、５）報道を正しくつかむ（メディア・リテラシー）、６）なかま意識をたかめる（民主的な社会建設、紛争の平和的解決）という 6 つである。師井の考えは、平和教育の最広義のとらえ方として、依然として参考になると思う。

[3] 津田幸男『英語支配の構造』（第三書館、1990 年）以来の津田幸男の研究は興味深い。

[4] ダグラス・ラミス著／斉藤靖子ほか訳『イデオロギーとしての英会話』（晶文社、1976 年）。

[5] 言語の側面から平和について考える「平和言語学」（peace linguistics）という研究分野が 1970 年代からあり、ブラジルのフランシスコ・ゴメス・デ・マトス（Francisco Gomes de Matos）を中心とする研究業績の蓄積がある。英語教育を平和をつくる言語実践へ変えていく教育実践もある。

[6] パウロ・フレイレ著／三砂ちづる訳『被抑圧者の教育学　50 周年記念版』（亜紀書房、2018 年）。

ジーン・シャープを読む日々（１）

大里 重彰

お久しぶりです。前回の号に寄稿しました、入会三か月目の大里です。京都で暮らす24歳です。最近は大畑さんの薦めでジーン・シャープの ”The Politics of Nonviolent Action”（1973） を英語で読んでいます。

前の号から三か月、総選挙、ベネズエラ攻撃、イラン攻撃など目まぐるしい日々でした。与野党・メディア関係者ともに予想しないタイミングで、明らかに高支持率を理由に党利党略で解散した高市首相には怒りを覚えます。そもそも憲法上、首相がいつでも衆院解散できるという論理には無理があると思います。

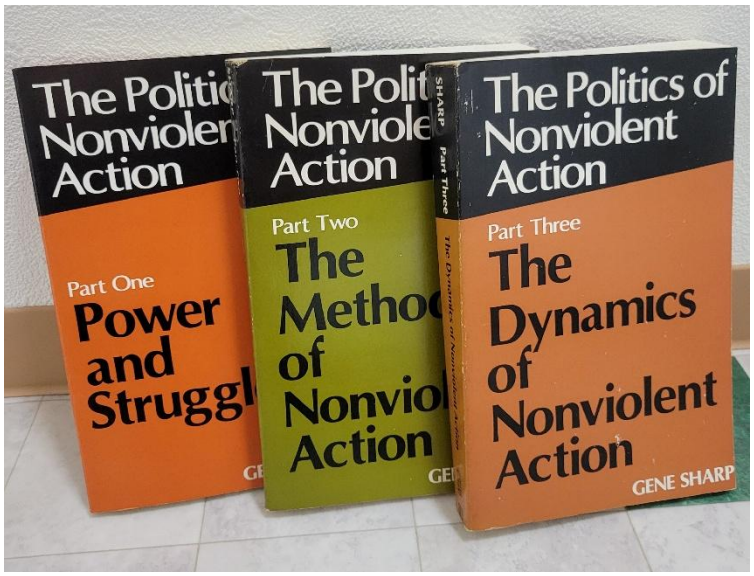
私は青年団体の活動をしていて、この数か月の間に数百人の若者と街角で話しました。ジーン・シャープが持っていた人民の見方が今ほど大事な時はないと思います。シャープは抑圧に抵抗する主体を倫理的エリートに絞らず、いわば「普通の人たち」の状態をよく考慮して戦略を立てるべきだと言いました。

街頭ですぐに出会える初対面の若者は、確かに少なくない数が高市首相に期待していたり軍拡を問題視していなかったりします。しかし、戦争に心をいためていること、今の政治を変えるべきこと

は半ば前提とした上でどう変えたらよいのか真剣に悩んでいることは、多数の若者の傾向だと感じます。それを非暴力・平和の方向にいかにつなげていくのかが課題であり、これは絶望的な仕事ではなくスリリングで面白い仕事です。

さっそく読み始める

前置きが長くなりましたが、ジーン・シャープの ”The Politics of Nonviolent Action” を読む日々で思い浮かんだこ



とを書きます。一つは、やはり理論的主著だけあってシャープの権力論がより詳細にわかってきたということ、もう一つは現状かなり緩やかなこの著作との格闘のペースをどう早めるかということ、そして最後に名古屋の伊江島写真展で実際に非暴力直接行動の記録を見て思ったことです。

ジーン・シャープの権力論によれば、権力は人民の服従のおかげで成り立っており、権力者は６つの権力の源泉から権力を引き出します。

６つの権力の源泉は、権威、人的資源、物的資源、専門知識・技術、無形の要素、制裁です。この権力論と、６つの源泉それぞれの端的な説明はシャープの本にたいてい出てきますが、６つの源泉それぞれの意味、違い、相互作用を細かく書いているのは ”The Politics of Nonviolent Action” ならではだろうと思います。

実際のところ、たとえば権威（Authority）と無形の要素（Intangible-factors）はどう違うのか、人的資源と専門知識・技術（専門家・技術者のこと）がどう違うのか、６つの権力の源泉は互いに独立しているのかそれとも相互作用するのか、私はこのあたりを疑問に思っていました。読み進めるうちに、これらの疑問の答えが少しずつわかりました。

たとえば権威は権力者に関するもので、権力者に従うかどうかという狭いものです。一方で無形の要素は人民に関するもので、慣習やイデオロギーなども含んだ広いものです。その他の疑問についても、いくつか答えを得ました。

それらを全て紹介することはしませんが、特に面白いと思ったのは６つある権力の源泉の相互作用です。たとえば権威はその他の権力の源泉へのアクセスの基盤になっていますから、権威がなくなればその他の権力の源泉へのアクセスにも著しい問題が生じることになります。また、権力者としては制裁を課すモチベーションが生まれます。しかし制裁で権威が戻ってくることはありません。

他の著作でシャープは６つの権力の源泉を紹介し、権力者による源泉へのアクセスを封じることで権力を弱体化させられると言いますが、６つの源泉の相互関係がわかればさらに考えやすくなった気がします。

シャープの理論的な主著を読んで、このように理論の解像度が上がっていくのは楽しいです。進み方は遅いですが、少しずつ読み進めていきたいと思います。コツコツと規律ある読み方をして、積み重ねで進めていきたいです。

時間と規律、資本主義

この本を読み進めながら思ったもう一つのことは、時間の使い方と規律についてです。自分自身も読みたい本やしたい

活動がたくさんある中で、最小の資源で最大の成果を得るためには戦略が必要だとわかりました。

資本主義が私たちに多忙さを課してくる現代、難しい本を読み切るだけのことにも規律と戦略が要求されるように思います。だから、時間を有効に使って一日に一段落だけでもコツコツと読み進めていくのがよいし、その決意をしようと思いました。

多忙な現代人と時間の使い方というテーマでは色々な考え方が発表されているようです。気になって読んでみたことがあります。限られた時間をいかに有効に使うか、仕事に縛られすぎないことやきちんと休養をとることを説く本もありました。また、時間は有限ではあるが量的な資源とは捉えずに豊かな過ごし方を追及しよう、という本もありました。時間というものを主観的に捉えるのか客観的に捉えるのか、資源と捉えるのか体験と捉えるのか、多様な潮流があるとわかりました。

資本主義が時間を奪ってゆく今日、そして起きている戦争を止めるためにいくら頑張っても足りているとは言えないような今日、必要な時間論はいかなるものか。私としては、時間は客観的な実在として捉えるべきだし、管理できる資源と捉えるべきだと思いました。時間をそのように捉えたうえで価値判断として何に時間を使うかよくよく検討し、取捨選択して生きていくしかないのでしょう。また、訓練してより短い時間でより多くのことをできるようになっていきたいとも思います。時間管理や規律一般が悪ではないと思います。時間管理や規律一般を拒否するなら戦略は作れないし、平和を作るための人間的な力を得ることもできなくなってしまう気がします。

自分にできる平和を目指す取り組みとしても、また学び方の訓練としても、”The Politics of Nonviolent Action” を計画的・規律的に読み終えることが今の自分にとって大事だと思います。引き続き読み進めていこうと思います。

阿波根昌鴻写真展に行って

”The Politics of Nonviolent Action” を読み進めて理論探求しているまさにその時、名古屋で阿波根昌鴻写真展が開催されて非暴力直接行動の実践の記録も見る機会に恵まれたのは幸運でした。お誘いくださった大畑さんはじめ写真展を開催してくださった皆様には感謝の気持ちでいっぱいです。京都から名古屋までは新幹線で30分強しか、かからないため仕事の合間を縫ってお邪魔することに成功しました。

非暴力直接行動で実際にたたかった人たちはどんな顔をしてたたかったのか写真で目にすることができたのは、理論探求の時間を血の通ったものにしてくれました。

怒りだけでも悲しみだけでもなく、しかし笑えるような心情でもなく、という複雑な表情ばかりで、私は見ていて何とも言えない気持ちになりました。

以上が、”The Politics of Nonviolent Action” を読み進める日々で考えてきたことです。まだまだ三巻中の第一巻の冒頭、第一章の中の「政治権力の社会的源泉」のセクションですから、ペースを上げながら倦まずたゆまず読んでいきたいと思います。青年期のうちにこんな読み応えのある古典、学びがいのある実践に出会えてよかったと思っています。

トーマス・シェリングによる序論（筆者がまとめたシェリングから本書への序文要旨）

＊本書は非暴力の政治的行動を（軍事戦略や軍事戦術がさらされるであろう）冷静で詳細な精査の前にさらした。

＊一方、シャープが非暴力行動について行ったような注意深く包括的で細部に立ち入り豊富な歴史的事例もあるような研究は、目的意識のある政治的暴力については行われていない。

＊本書の暴力行動版と本書を比較できれば有意義だっただろう。ただし、比較すべきはもたらしうる災厄の甚大さではなく、政治的目的の達成に対して非暴力行動と暴力行動がそれぞれどの程度のコストを要求し、どの程度資するかである。

＊非暴力行動も暴力行動も、人の行動を制約したいという目的は同じである。

＊非暴力行動と暴力行動の比較は、気に入った方を選ぶといったものではなく、共通点と相違点を異なる文脈のなかで照らし、政治過程そのものを明らかにすることになる。

＊強制的性格の強い非暴力の技巧は暴力行動との共通点さえも持つ。

＊暴力行動でも非暴力行動でも、その戦術の評価項目――いわゆる闘いの原則――は変わらない。むしろ非暴力行動の方が妥当する。

＊暴力闘争は非暴力闘争よりも始めやすいが、しかし冷静に目的意識を持続させながら取り組むことはより難しく、評価指標は目的達成ではなく敵方の妨害になってしまう。

＊対応して、非暴力行動でもリスクと苦労は重視されるが、それらが究極の目的と混同される傾向は少ない。

＊本書での非暴力行動の様々な要素は常に政治的目的と結び付けて考察される。個人の満足の源としては考察されない。

＊本書は政治哲学の改宗を迫るものではなく、理論と実例を用いて戦略論の複雑な分野の知識をもたらすものである。

＊非効率で獰猛な暴力という選択肢よりも有効で巧妙な非暴力行動という選択肢に向き合った方がよい。

トーマス・シェリング
（1921～2016）アメリカの経済学者、政治学者、ゲーム理論家。2005年ノーベル経済学賞受賞。

非暴力という生き方
― 沖縄･伊江島　阿波根昌鴻を知る ―

大畑　豊

戦後、伊江島、沖縄の米軍に対する土地闘争を主導した一人であり、その象徴的な人物である阿波根昌鴻が撮った写真の 1 年にわたる全国巡回展が終わりました。那覇に始まり、川崎・札幌・広島・福岡、そして最後が先月、名古屋でした。戦後 80 年を期に、阿波根の写真をとおして沖縄からの平和の発信をしていこうということで企画されました。
闘争当事者が写真記録を残すということはあまりないようで、撮影者と被撮影者との関係も近く、それであるがゆえに撮ることが可能となった作品も多いと専門家は言います。没後に発見された 3200 枚のネガのうち、400 点近くが展示され、大きな反響を得ました。
「沖縄のガンジー」として知られる一方、阿波根って誰？という方も多いので、各地で講座講演も持たれ、その実践と思想を共に学びました。そのときに用意しました阿波根語録に加筆し、掲載させていただきます。まるで歴史の時計を逆回しているような、人権がないがしろにされ、法治から軍事力への世界に向かうかのような今こそ、阿波根の思想と実践に学ぶことは多いと思います。

「この憲法が日本国民に保障する基本的人権は、人類の多年にわたる自由獲得の努力の成果であって、これらの権利は、過去幾多の試錬に堪へ、現在及び将来の国民に対し、侵すことのできない永久の権利として信託されたものである。」
（日本国憲法　第 97 条）

阿波根昌鴻（あはごん　しょうこう）

1901 年沖縄県本部（もとぶ）で生まれる。2002 年に 101 歳で逝去。1920 年洗礼を受ける。1925 年伊江島で結婚、キューバ、ペルーへ農業移民として渡り、1934 年帰国。ペルーで読んだ西田天香の『懺悔の生活』に感銘を受け帰国後、京都の一燈園を訪ねる。伊江島でのデンマーク式農民学校の設立を目指していたが、沖縄戦で破壊される。一人息子の昌健も徴兵され戦死。戦後、米軍による土地の強制接収により、学校用地も含む、島の 63%が米軍用地となり、そこから土地を取り戻す伊江島の住民と米軍との闘いが始まる。その闘いの過程での米軍の暴虐を証拠として残すために当時は珍しいカメラを購入し写真を撮り始めた。1970 年団結道場完成、1984 年「わびいの里」並びに反戦平和資料館「ヌチドゥタカラの家」設立。

1　移民として、キューバ、ペルーへ

向こうの土地はタダで提供するという・・土地というのは山林。開墾するまでの機械、道路づくり、耕地の整備、食べる物、みんな資本家の店から買わなければいけない。全部利益は、資本家がとる。資本家、資本主義の搾取のやり方、方法を充

分に学んだような気がしましたね。

なに一つみやげも持たず、つぎを当てたボロの労働着だけを記念品みたいに持って帰りました……ただペルーの古本屋で買って読んだ西田天香（てんこう）先生の『懺悔の生活』の言葉だけが生きていました。

２　一燈園を訪ねる

わたしは西田天香さんの生き方に学ぶ決心をし、日本に着くとすぐに天香さんを訪ねました。

一燈園（京都）は能力に応じて働き、必要に応じて受けとる・・何人も平等で、おがみ合い、ゆずり合い、助け合い・・私にとって一燈園は理想の園であり・・すべての国が、すべての人びとがそうでなければならない。（その後、伊江島に帰る前に静岡県にあったデンマーク式農民学校「興農学園」に入学し学ぶ）

３　デンマーク式農民学校が８割方完成（フォルケホイスコーレ、国民高等学校）

いちばん大切な仕事をしている農民が、バカにされるのはおかしい、農民のための学校をつくろう。

立派な仕事をやる農民こそ、人間として堂々と何でも話せる人間であるべきである。そういう農民を作るための教育をする学校をつくる。宗教、儒教、仏教、キリスト教、その他あらゆる宗教、哲学、そして歴史。

基地解放後に真謝（まじゃ）の地に、わしの考える農民学校をつくりたい。わしはまだこの夢を捨ててない。というより、米軍に対する土地闘争の中で、人間としての知識を教える農民学校が必要であるとの思いはいっそう強くなったのであります。

（農民学校は戦争前に建物設備等 80%が完成していたが、戦争ですべて壊され土地は米軍基地として強制接収された）

４　反戦平和資料館をつくろうと思った理由

① 土地闘争を続ける中で、平和を実現するためには、戦争というものを根本から勉強して、原因をしらべなければいかな

い、そう強く感じるようになっておりました。

② 反戦地主として土地闘争を闘ってきましたが、同時にもう一方で自分自身の反戦平和運動を考え、実践してきました。それは生協活動であり、「わびあいの里」計画であり、「反戦平和資料館」づくりでした。

③「侵略のための教育」に大きな原因があったのですから、教育が大事である。戦争がいかに無惨なものであるかを知ってもらう活動が大切である・・反戦平和のための資料館という考えが浮かんできて・・何としてもつくりたい。

④ あちこちの資料館を見たり・・いまあるほとんどの資料館はどこでも・・その残酷な戦争は誰がどうしてつくったのかということに、まったくふれていない・・安保条約や基地反対についてはどこにも書いてない・・安保にも基地にもふれないということは、本当の平和をつくることにつながらない。

5　平和運動

⑤ なぜわしが、これほど平和運動に熱心に取り組んでいるのかといえば・・地球ともかえられない、たった一人の息子を戦争でとられて殺された。その何物にもかえられない息子を失った親としての痛惜の思い、これが基本にある。

⑥ 核戦争準備を進めている側の力が強くなれば核戦争となり、これに反対する平和の力が強くなれば平和になると信じています・・平和の側の力が強くなるために御協力と御指導を賜りますよう心から御願いを申し上げます

⑦ 平和というものは闘いとるものであって、支配権力が譲ってくれるようなものではない。

⑧…その他偉い人といわれるところにはどこへでも出かけて助けて下さいとお願いしました。どこでも満足のいく答えはありません。そのとき私たちは初めて考えました。お寺はお経を読んで葬式をするところであったのか、教会は讃美歌をうたって説教をするところなのか、学校は字を教えるところであったのかと。道理をわきまえ、勇気もあるのは、われわれ農民であると思いました。

⑨ 闘ってみてつくづくわかったが、基地があるかぎり、わしらは戦争とは無縁でいられない。米軍といわず、すべて軍隊というものが、どこであろうと存在し、さらにそれを認めるような体制があるかぎり、この闘いは終わらない。

⑩ 平和は語る、では何にもなりません。私たち伊江島の農民は、平和を実践してきました。

⑪ （軍用地）契約することは戦争につながり、戦争を認め、戦争に協力するものであります・・契約を拒否し土地を守ることは、我々の財産と生命を守ることであり、又世界全人類の真の平和と繁栄の道であることをかたく信じております

・・すべての宝は土地から生まれる・・

土は魔法使いのようだよ。同じ土にいろんな種を蒔くと、いろんな命を育ててくれる。土は差別もしない。命を育む土地を、人殺しの練習のためには使わせない。土地は万年。金は一時。

⑫ 我々を犠牲にし不幸にした戦争。我々は二度とだまされない、二度と戦争をしない、させない、このあやまちを二度と起こさせない。

⑬ たった一人でも最後まで耐えるなら、勝利は絶対確実である

⑭ わしらの平和運動は、沖縄から基地を無くしても終わらない。

日本の平和憲法を、世界中で実現させて、世界中の武器を全部なくす。そして、地球上の資源を、地球上の生き物が、平等にバランス良く分け合って、生きてゆけるような社会にするまでは、平和運動はやめられない。

6　生活の中からの平和づくり

⑮ 口先だけでいくら叫んだところで強い権力の座にある戦争屋に勝つことはむつかしい。

戦争反対は生活の中から始めなければならない。戦争屋の喜ぶことはしてはならない。

彼らは私たちの分裂、ケンカを喜ぶでしょう。消費は美徳に踊らされて貧乏するのも喜ぶでしょう。不規則な生活をして病弱になることも喜ぶでしょう。時間を無駄にして勉強をしないで無知になるのも喜ぶでしょう。

私たちは、戦争屋（悪魔）を喜ばさない生活をすることも大事な平和運動であると考えて、その実行に努めております。

⑯ 島民の生活を守る活動を一緒にやらないと、平和運動も長続きしません・・自分たちで店をつくってできるだけ安く売ろう・・体の不自由な人や弱い人がいっしょに働ける職場をつくろう・・アダン葉による手工芸品、帽子やカゴ、それに竹細工の生活用品・・反戦平和資料館をふくむ土地一帯を「わびあいの里」と名づけて、身障者の人たちの交流の場ともしよう。

⑰ 平和をのぞむ運動家は、生活の場でも平和でなければ本当の平和は実現しない、そういうふうにわしは考えております。何か特別なことをするのが平和運動ではない。悪いことだけはしない、生活の場から平和をつくりだしていく、これが基本であるとわしは考えておる。

7　戦争の原因と平和の実現

⑱　その中で私たちはさらに考えました。この土地問題はなぜ起きたのか、戦争があったからである。戦争はいったい誰が起こしたのだ、戦争をすれば誰が殺され、誰が損をするのか、そして誰が生き残り誰が得するのか。

⑲　「物が平等に分配されても感謝の心がなければ争いはなくならない」ということを教えられましたがね。わしらは心が正しくても国の政治に無知では人類が住みやすい平和で幸福な社会をつくることはむずかしいし、また広い知識があっ

ても心が正しくないと、真の平和の実現はないと考えたんです。

⑳ 人類のあるゆる不幸の原因は人と人との争い、国と国との戦争に起因する・・争いの原因は自己の権利意識、顕示欲、相手の誤りを許すことのできない寛容のなさ。

㉑ 争いを無くし、家庭も社会も国も平和で豊かに暮らすことをどうすれば実現できるか・・京都の一燈園・創設者、西田天香の教訓の中に、それを発見することができました。

㉒「他人の利益を先にし、自分の利益を後にする。他人の悪いことは、自分が悪いからではないか」という、この詫びる心によってしか実現されないのではないかという固い信念から「わびあいの里」と名付けました。

㉓ 一燈園の精神と実践に学び、他を責めないことから出発し・・真の平和をつくるのが願いであり、目的であります。

㉔ 人間はお互い許しあい、反省しあい、人を責めずにわびあえる心がほしいものであります。

㉕ だまし合い、奪いあい、殺し合うのではなく、教え合い、譲り合い、助け合って共に生きる。

㉖　五本の指は、すべて力がちがう、形もちがう、だがその各役割は大きい。全部が協力し、理解し、団結すれば何事も簡単に出来る。出来た時に威張る指がない。これこそ助け合って共に生きる平和の道、人聞としての道である。

私たち無力の農民。この五つの指、団結するとお箸も取って御馳走。ペンも取って手紙も書ける

㉗　やっぱりまた宗教でないと平和はつくれないと考えるようになって、こんどはキリストの生活から学ぶ。仏教の釈迦から学ぶ。釈迦はどうして生きたか。どんな説教をしたかではなくて生き方から学ぶという考え方に変わった。

わしらはこの茶碗も神様。この茶碗は生まれてから死ぬまで奉仕だけですよ。ちっとも欲がない。こういうのが神様。王様の口もへいきですよ。怖がりませんよ。乞食の口にもっていっても汚いと思わない。これが神様と考えるようになりました。

私たちは武器をもって生きる人間は悪魔。武器を持たないで生きるものは全て神様、宗教語でいうと善と考えるようになりました。あそこを歩いている鶏も生まれたときから死ぬまで人間のために奉仕し、人間がいくら卵を盗んでも武器をもって取り返しにこない。これも神様。

㉘ わしらの闘いを非暴力直接行動というようないい方をしてくれた人がおる。だがわしらの闘いの基本は、何より相手のことを考える闘いということだったのであります。

㉙　米軍との三十年間の闘いで、私たちは米軍に悪口を言わず、ウソ、偽りを言わず、短気をせず、米国民の不利不幸になる

こともやりませんでした。勿論、日本、ソ連、アフリカ、世界のどの国の不利不幸になることはしませんでした。

平和の実現はこの心、この行為でなければ難しいと思います。

8　文明

㉚ 現代社会のあまりにも繁栄を遂げたその弊害としての歪みが随所にみられるように、物質文明第一主義でそれを謳歌する時代。しかしながら、いつまでもそのような時代が続くか、甚だ疑問があります。

食糧が不足する時代が到来しても、電気、ガスその他すべての現代文明の利器がストップしても、安心して大自然の中で生きながらえる準備が必要である。

㉛ いい生活をするというのが若い者たちの理想になって、金が非常に必要になってきた。だから若い人たちはもう基地反対をいわなくなった。

㉜ 基地からくる「こぼれ金」に頼らないと村の経済が成り立たない・・そんないびつな経済は経済としても不健康で危険なことであります。なんでも金を優先する考えは人の心を毒してしまいます。

㉝　世の中に善人がどんなにふえても資本家が権力を握っているあいだは戦争はなくならない。それは人類の５千年の歴史が証明している。

９　「陳情規定」

これから鬼畜とたたかうには、こちらは人間になる。鬼畜を討ち滅ぼす事は難しい、生き返ってくる。だから鬼畜であるアメリカを人間に教育する。子供を教えるように誠意をもって教えていく。そのために『陳情規定』というのを作った。

一、反米的にならないこと
一、決して短気をおこしたり相手の悪口は言わないこと
一、必要なこと以外はみだりに米軍にしゃべらないこと。正しい行動をとること。
一、うそ、いつわりのことを言わないこと
一、会談のときは必ず坐ること
一、米軍と話をする時は　なるべく大勢の中で何も手に持たないで座って話をすること
耳より上に手をあげないこと（米軍はわれわれが手をあげると暴力をふるったといって写真をとる。）
一、大きな声を出さず、静かに話す。
一、布令布告によらず道理と誠意を持って幼い子供を教え導いて行く態度で話すこと
一、沖縄人同志は如何なることがあっても決してケンカはしない
一、軍を恐れてはならない。
一、人間性においては、生産者であるわれわれ農民の方が軍人に優っている自覚を堅持し、破壊者である軍人を教え導く心構えが大切であること。
一、このお願いを通すための規定を最後

まで守ること。
右誓約いたします。
一九五四年十一月二十三日
真謝、西崎全地主一同（署名捺印すること）

10　資料館・団結道場から

○ この不幸な土地問題が起きたのは、日本が仕かけた戦争の結果であり、我々にもその責任があることを忘れず、米国民を不幸にするようなことはつつしむこと。

○ 米軍との三十年間の闘いで、私たちは米軍に悪口を言わず、ウソ、偽りを言わず、短気をせず、米国民の不利不幸になることはしませんでした。平和の実現はこの心、この行為でなければ難しいと思います。

○　米軍に告ぐ
一、 土地を返せ　ここは私たちの国
　　私たちの村　私たちの土地だ
一、 侵略者伊藤博文　東条の悲劇に学べ
　　汝らは愛する家族が
　　米本国で待っている
一、 聖なる農民の忠告を聞け
　　さらば米国は永遠に栄え
　　汝らは幸福に生きのびん
・剣をとる者　剣にて亡ぶ（聖書）
・基地を持つ国は基地にて亡ぶ（歴史）

【参考】『米軍と農民』　『命こそ宝　沖縄反戦の心』　共に阿波根昌鴻・岩波新書
『教えられなかった戦争・沖縄編 ― 阿波根昌鴻・伊江島のたたかい』高岩仁（映像文化協会）

伊江島学習会 ― 無関心な人々を恐れよ ―

安藤　博

ことしの伊江島学習会は、開催日 3 月 28、29 日の一週間ほど前に起きた二人の水死者を出す事故のことが参会者の胸に重くわだかまっていて、死者を悼む黙祷から始まりました。会場は前年と同じ伊江港直近の＜伊江島はにくすにホール＞。初日 28 日（土曜）の基調講演は、作家・人権教育研究家伊波敏男さんの「ハンセン病問題と人権について」。この講演をうけてシンポジウム「人権問題を考える」。その後、沖縄戦をテーマとした歌語り「忘っつぃんのぉ」を歌手の山本晴美さんが演じました。

二日目の 29 日（日曜）は、「阿波根映像」の映写、次いで「戦後 80 年　平和を発信する沖縄写真展」の開催状況報告と「沖縄県における PFAS(自然界には存在しない人工的有機化合物)問題の現状」報告。最後に「平和宣言」が読み上げられ、会場の参加者全員がこれを拍手で承認して学習会は正午に終了しました。

初日の、ハンセン病患者に対する「差別」についての講演と伊江島での（いわゆる）”集団自決”の歌がたりは、どちらも重く聞いているのもつらいほどでした。しかしその内容は、阿波根昌鴻が米軍相手に行った農地返還の闘いなどを思い起こさせるもので、特に「非暴力」の闘いを支える学習の大切さと「耳から上に手を上げない」などの闘いの言葉遣いの見事さを改めて知ることができました。

伊波さんは、講演の終わり近くにポーランド生まれの詩人ブルーノ・ヤレンスキー（1901-1941）の言葉を紹介されました。死後の 1956 年に『新世界』誌に掲載された「無関心な人々の共謀」のなかで謳われている言葉で、「無関心な人々を恐れよ－かれらは殺しも裏切りもしない。だがかれらの沈黙の同意があればこそ、地上には裏切りと殺戮が存在するのだ」。

「無関心」の恐ろしさは、阿波根昌鴻の言葉として以下のような墨書が＜わびあいの里＞の壁に貼られています。

「平和の最大の敵は無関心である
　戦争の最大の友も無関心である」

用意された講演等は極めて密度が高く、多くの大切なことを「学習」できました。

理事会・総会報告　　NPJ 事務局長　安藤　博

2026 年 4 月 12 日東京・淡路町の事務所で理事会/総会が以下のように開催された（Online 会議を同時開催）。

＜議題 1＞ 2025 年度活動報告

● 沖縄・辺野古新基地建設に抵抗する非暴力行動に対する支援を引き続き行った。

● 東北アジア地域の平和構築を目指して平和実践トレーニングを行っている NARPI への資金支援を引き続き行った。

● ニュースレター92 号-94 号を発行。

＜議題 2＞ 2025 年度会計報告・決算見込

2025 年度に大口の寄付金があったことにより、2026 年度への繰越残高が前年度より約 55 万円多い 1,328,900 円となった。

＜議題 3＞ 2026 年度活動方針】

● 沖縄・辺野古の米軍基地建設に反対する非暴力抵抗の活動を引き続き支援する。2026 年 3 月に平和学習の高校生の海案内中に、生徒 1 人を含む 2 人の犠牲者を出す痛ましい転覆事故が起き、新基地への抗議行動のみならず、沖縄の平和運動、平和学習一般への誹謗中傷も起きている。NPJ としては事故原因の究明を注視するとともに、非暴力平和構築活動の支援に今後も力を入れていく。

● 「非暴力平和」を、特に若者に伝えてくための学習、トレーニングの場を作っていく。2025 年 3 月に亡くなった国際 NGO、NP 創設者のひとり、デイヴィ ッド・ハートソーの実践をたどり、また非暴力平和思想の源流をガンディーにさかのぼって、伝えていく。

● 非暴力活動支援、東北アジア地域の平和構築を目指して 平和実践トレーニングを行っている NARPI への資金支援を引き続き行う。

＜活動方針＞を補足することとして、君島共同代表が以下 3 件を述べた。

○「非暴力平和」を若い世代に継承していくため、特に前世代とは明らかに異なる可能性を持つ”Z 世代”（20 歳代）を主体とする活動をともに行っていく。

○「非暴力」だけ全てが解決できるわけではない。「辺野古」の問題にしても、私はデニー知事に伝えた「地域外交」による“攻め”のように、広い視野を持って取り組んでいくことが必要。

○フェミニズムの非暴力平和思想からも学ぶ必要がある。ジュディス・バトラー（哲学者、米国カリフォルニア大学バークレー校教授）の『非暴力の力』（佐藤嘉幸・清水知子訳、青土社）は、人間は脆弱で互いに依存しているのであり、人間相互の関係は非暴力になるのだ、と喝破している。岡野八代『ケアの倫理――フェミニズムの政治思想』（岩波新書）も参考になる。

＜議題 4＞ 人事

大橋祐二理事が健康上の理由で辞意を表され、これを承認した。

NPJ　2025年度実績見込

2026年3月1日

項目	2024年度実績	2025年末実績推定	2025年度実績見込	備考
正会員費		260,000	260,000	
賛助会費	457,000	185,000	185,000	
カンパ	651,000	1,186,000	1,186,000	注1
雑収入	2,571	764	764	
経常収入計	**1,110,571**	**1,631,764**	**1,631,764**	
発送配達費	50,121	55,623	55,623	注2
給料手当	240,000	180,000	240,000	
事務所賃貸料	60,000	60,000	60,000	
振込料	14,174	8,334	8,334	
事務費	14,850	0	0	
旅費交通費	4,700	4,800	4,800	
通信費	0	0	0	
雑費	0	0	0	
広報費	41,250	28,050	42,000	注3
活動支援費	447,410	181,960	410,000	注4
会場費	0	0		
講師費用	0	0		
経常支出計	**872,505**	**518,767**	**820,757**	
当期経常収支過不足	238,066		811,007	
前期繰越剰余	-138,159		80,583	
今期経常繰越剰余金	99,907		891,590	
特別収支				
前記残高	**917,310**		**677,310**	
特別カンパ				
今期支出	240,000	180,000	240,000	注5
特別収支残高	**677,310**		**437,310**	
未払金	0		0	
残高合計	**777,217**		**1,328,900**	

注1：大口カンパ2口あり、感謝

注2：ニュースレター：92～94号

注3：ウエブ管理費12～3月分

注4：大畑レンタカー（1～3月分60,000）ガソリン代48,000+4～9月分未計上：30,000

NARPI：30,000

注5：沖縄支援費：1～3月分

Nonviolent Peaceforce

非暴力平和隊の理念と活動に賛同・支援してくださる個人および団体を会員として募集しています。入会のお申込みは、**郵便振替、銀行振込、非暴力平和隊・日本のウェブサイトの入会申込ページ**をご利用くださいますようお願いいたします。

◎正会員（議決権あり）
- 一般個人：10,000円
- 学生個人： 3,000円

＊ 団体は正会員にはなれません。

◎賛助会員（議決権なし）
- 一般個人： 5,000円（1口）
- 学生個人： 2,000円（1口）
- 団体　　：10,000円（1口）

■ **郵便振替**：00110-0-462182　加入者名：**NPJ**
＊通信欄に会員の種類を（賛助会員の場合は口数も）ご明記ください。

■ **銀行振込**：**三井住友銀行　白山支店　普通　6622651**　口座名義：**NPJ代表　大畑豊**
＊銀行振込をご利用の場合は、お手数ですが電話・ファックス・メールのいずれかを通じて入会希望の旨、NPJ事務局までご連絡くださいますようお願いいたします。

■ **ウェブサイトからのお申込み**：http://np-japan.org/4_todo/todo.htm#member

皆さまからのご支援に感謝申し上げます。（敬称略、12 月～3 月、26 件、49 万 3 千円）

朝倉恵、川辺希和子、柳沼清正、馬渡雪子、福崎裕夫、開口裕教、安藤博、大畑豊、大橋祐治、俵恭子、山本賢昌、野島大輔、東豊久、武井陽一、矢島十三子、浅田眞理子、藤岡惇、前田惠子、浅見靖仁、本東宏、中森圭子、大島みどり、徳永ヨウ、武藤陽一、大谷義彦

辺野古・大浦湾での海案内の最中に、高校生一人と船長一人が亡くなり、14 人が負傷するという痛ましい転覆事故が起きてしまいました。私は抗議船船長の一人でもあり、深く哀悼の意を表したいと思います▼この高校は京都にあり、また平和学習としての研修であったということで、巻頭言でも言及した君島共同代表には身に詰まる事故であったと思います▼私は事故のあった 3 月 16 日には「阿波根昌鴻写真・名古屋展」のあとに予定されていた辺野古報告等の会合に出るため名古屋におりました▼海での抗議行動、海案内の実施団体であるヘリ基地反対協が原因究明を含め全力で対応していますが、後手後手に回ってしまっていることが指摘されています。事故から 2 週間以上経った 4 月 2 日に反対協からの謝罪文が HP にアップされました▼反対協や抗議行動に対してのみならず、学校や被害者、平和学習に関する誹謗中傷、誤った情報も多く、このようなことで辺野古が大きく全国に取り上げ挙げられることには忸怩たる、思いがあります▼たいへん不幸な事故が起きてしまいましたが、沖縄への多大なる基地負担、米軍基地被害に対しての声は上げ続けなければなりません▼中東へも横須賀から沖縄経由で艦船が、また沖縄の部隊が派遣され、平和の島でなく、また「悪魔の島」と沖縄が呼ばれるのではないか、攻撃対象となるのではないかとの不安の声も聞かれます。「基地がある限り戦争と無縁ではいられない」阿波根昌鴻（大畑）